

黒

坂田風

いつも通りの最寄りのバス停を降りると
そこは暗闇だった

夜の比ではない

何を見ているのか

どこにいてもわからない

おそらく田んぼ道であるはずの場所を歩く
たとえ視界を奪われても

この道ならば目を瞑ってても歩けるはずだ
いくら歩をすすめども

なんの景色は見えてこない

孤独へと誘われ

心が痛み侵されてゆく

ここは堤防のあたりだろうか

猫の鳴き声 お隣さんの話声 車の音

聞き慣れた音たちは削り取られたように

奈落へ吞まれていた